自民総裁選「陰の主役」安倍前首相

マスコミを総動員した自民党総裁選が終わった。朝日 9 月 30 日社説は、「国民の信を取り戻せるか」と問う。社説を抜粋して紹介する。

衆院選が直後に控える異例のトップ選びとなった自民党総裁選は、決選投票の結果、岸田文雄前政調会長が河野太郎行政改革相を破って選出された。地方票で大きくリードし、「選挙の顔」選びを重視する議員票を呼び込む流れをつくりたいという河野陣営の思惑は不発に終わった。帰趨を決めたのが結局は、永田町の中の数合わせであり、安倍前首相ら実力者の意向に左右されたというのでは、岸田氏が当選後のあいさつで力を込めた「生まれ変わった自民党」というには程遠い。実際、安倍氏は、今回の総裁選の「陰の主役」といってもいい存在だった。当初、立候補も難しいとみられていた高市氏が、河野氏を上回る議員票を獲得できたのも、安倍氏によるてこ入れがあってこそだ。

懸念されるのが、岸田氏が総裁選の最中、安倍氏に配慮し、その歓心を買うような発言を繰り返してきたことだ。森友学園をめぐる公文書改ざん問題では、「国民が（調査が）足りないと言っている」といいながら、再調査を否定。推進の立場だった選択的夫婦別姓も慎重姿勢に転じた。安倍氏が旗を振った自衛隊明記を含む改憲 4 項目の発議に意欲を示し、敵基地攻撃能力の保有も「選択肢」とした。女系天皇への「反対」も明言した。これでは、負の遺産の清算どころか、政権運営全般に安倍氏の影響力が強まらないか、先が思いやられる。安倍・菅政権の反省を踏まえた政策を推進するなら、安倍氏の影響力は拭い去らねばならない。党役員と内閣の人事が試金石となる。

翌 10 月 1 日の同紙朝刊には、「岸田人事 安倍カラ―」と大きな見出しが。党運営の要である幹事長には、安倍前首相に近い甘利税調会長を起用する。甘利氏は安倍氏や、自身が所属する派閥会長の麻生副総理兼財務相と親しく、3 氏の頭文字をとって「3A」とも称される。総裁選では、岸田氏陣営の顧問に就任。高市氏を全面支援する安倍氏と、麻生氏の連絡役を果たし、岸田氏の勝利に貢献した。

同紙 2 日の社説は自民役員人事について、これが「再生」の姿かと疑問を投げかける。幹事長に就く甘利氏は、第 2 次安倍政権で経済再生相を務めていた 5 年前、現金授受疑惑を報じられ、閣僚を辞任した。自身や日書が口説きの見返りに建設会社から現金を受け取ったとして、あっせん利得処罰法違反などの疑いで告発されたが、嫌疑不十分で不起訴になった。刑事責任を問われなかったからといって、説明責任や道義的責任がなくなるわけでもない。

総裁選勝利の後、国民に示すといった「生まれ変わった自民党」の姿がこれなのか。有力者をおもんぱかり、現金授受疑惑の説明責任をいまだ果たしていないベテランに、党運営の要を託す人事を見せられては、その決意も疑わざるをえない。

（2021 年 10 月 3 日）